

一、コテイ節（本調子）
二、作田節

附 早作田節（本調子）
三、組物（本調子）

口説 萬歳カフス節 ウフンシヤリ節 サインソル節

四、仲風節（二上り）

五、大浦節（三下り）

〔音楽〕第一卷十一號 明治四十三年十二月 二〇頁〜二二頁

関連記事が左に掲載される。

「琉球歌に就て」東儀鐵笛

「琉球歌合評」（評者は高野辰之・本居長世・永井素岳・幸堂得知・三宅延齡・竹内平吉）

〔音楽〕第二卷第二号 明治四十四年二月 二七頁〜三二頁

「琉球歌合評に就いて」東恩納寛博

〔音楽〕第二卷第五号 明治四十四年五月 三五〜三六頁

明治四十三年十一月二十九日（火）幸若演奏（木曾願書・濱出（各一部））／桃井義久

明治四十四年六月十七日（土）於奏楽堂／文弥節演奏（出世景清四段目・國姓爺合戦（頁尽し））／岡本文彌・岡本文司（文彌の弟子）。二十日に再度文彌を招聘して掛員のみで演奏鑑賞。源氏烏帽子折の一部を蠟管に吹き込む）

演奏の前に高野辰之によって文弥節の起源沿革などについて解説があった。梗概（「文彌節に就きて」高野辰之）が『音楽』（第二卷第八号 明治四十四年八月 一八頁〜二〇頁）に掲載される。

明治四十四年七月三日（月）於奏楽堂／金平浄瑠璃演奏（四天王太田合戦

二段目）／五十嵐敬豊／三味線組歌演奏（飛驒組・葛の葉）山口菊次郎（囃託・山口巖）

演奏の前に高野辰之による講演「金平浄瑠璃及三味線本手端手につきて」があり、また散会後に掛室で五十嵐敬豊の金平浄瑠璃「中若鞍馬下り二段目」が語られた。

大正二年六月二十八日（土）於掛室／文弥節演奏（源氏烏帽子折・天神記（各一部））／岡本文壽、一部を蠟管に吹込む。

大正二年九月二十六日（金）声明（天台宗）調査（伽陀、諸天讚、法華讚、嘆、佛名、教化、四智梵讚、吉慶梵讚、百八讚、六道講式）／京都大原魚山宝泉院僧正瀧本深達・高弟竹内道忍。（二十九日蠟管吹込み（竹内）、三十日竹内に再調査）

大正三年六月九日（火）於掛室／薩摩琵琶演奏（宝來宮・石童丸・北白川宮・臺灣入ほか）／岡崎光男

大正五年二月二十五日（金）民謡演奏（安来節）出雲安来節家元渡邊イト・富田徳之助

大正五年五月九日（火）民謡演奏（船唄（屋らい目出度な・新玉の・松は松臺・皇帝・高砂の・やんれ宝來・松揃・みろく））／大和田雄次・大和田藤次ほか四名（下総古河）

大正六年六月十一日（月）於奏楽堂／声明（新義真言宗）講演／真言宗智山派管長大僧正瑜伽教如。一週間行われた。

大正七年六月二十六日（水）民謡演奏（追分節）／石津倉吉（北海道江差町）

大正八年十二月十三日（土）於奏楽堂／義大夫節演奏（鷗山古跡松（中将姫雪實の段）・烏帽子折幸源氏（伏見里の段））／貴田常次郎（囃託・竹本越路太夫）・竹本南部太夫・鶴澤寛次郎・野澤吉兵衛。

（八）出版

『近世邦楽年表』（三冊）および『箏曲集』（二編）が出版されている

る。『争曲集』の続刊(二編)、その他邦楽歌詞解説や五線譜楽譜などは刊行に至らなかった。本項にはそれら既刊、未刊の資料のうち緒言、凡例、曲目を載せる。

東京音楽學校

(手書き)

近世邦楽年表

邦楽年表編纂は明治四十一年十一月に着手され、高野辰之の指導の下に福田勘藏(黒木勘藏)がこれに当たり、東京音楽學校編『近世邦楽年表』として昭和二年までに三冊刊行された。

日付はないが、高野が編纂方針を記している(一)邦楽調査掛概況」の項参照)。編纂の経緯は「議事録」を参照されたい。

第一冊目の緒言として当初書かれた「序」(草稿)が残る。編纂開始の時期、未定稿(刊本では内題に記す)のことなどが明記されている。

序

本年表は本校に於ける邦楽調査掛の事業たる文字上の調査の一部に屬する邦楽年表の一篇として、本調査掛の編纂するところたり。本年表編成の議は明治四十一年十一月に決定し、調査委員高野辰之指導の下に調査囑託福田勘藏をしてこれに當らしめ、其の他の委員、囑託員亦直接間接之が作成を助けたり。然れども此の種の資料は極めて得易きが如くなれども、また極めて湮滅し易きものなれば、索求には頗る力を致したりと雖も尙且遺漏あるべしと信ず、よりにて暫く未定稿のまゝ印刷に附することとせり。他日資料の蒐集完了を得ば更に補修するところあるべし、博雅の士の資料を提供せらるゝを希ふや切なり

明治四十四年 月

(1) 『近世邦楽年表 常磐津 富本 清元之部』

明治四十五年三月三日、六合館書店発行。本文二百六十六頁、索引三十頁。正誤表付き。緒言の原稿では日付が四十四年九月二十日と記され、東京音楽學校校長湯原元一識としたのを東京音楽學校に更改している。また「凡例」でも「替櫓は其の都度一々之を記入するの繁を避けたる。蓋し明治以前に於ては、中村座は都座に、市村座は桐座或は玉川座に、森田座は河原崎座に替るを例としたればなり。」「豊後節諸流の系譜」などの部分が原稿から省かれている。

此書ハ本校邦楽調査掛ニ於テ編成シタルモノニシテ將來完成スベキ近世邦楽年表ノ一部ヲナスモノナリ

從來世ニ行ハル、書ニ歌舞伎年代記ノ如キモノアリテ劇場ニ用ヒラレタル淨瑠璃ノ外題太夫等ヲ年次ニ擧ゲタルモノ無キニアラザレドモ主トスル所ハ劇ニアリテ此方面ニハ遺漏甚ダ多ク載スル所亦委シカラズヨリテ先ツ最モ世ニ行ハレタリシ豊後三流即チ常磐津富本清元ノ分ヨリ之ヲ公ニスルコトトセリ

由來此類ノ資料ハ甚ダ得易キガ如クナレドモ極メテ湮滅シ易ケレバ探求實ニ容易ナラザルモノアリキ今ナホ幾多ノ缺陷ヲ認メザルニアラザレドモ暫ク之ヲ剗劔ニ附シテ世ニ公ニシ博雅ノ諸士ニ助言ヲ求メテ完成ヲ他日二期セントス

附言 此書ハ本校邦楽調査掛調査員高野辰之指導ノ下ニ調査囑託福田勘藏専ラ之ヲ編成シタルモノナリ

資料ニ關シテハ文學博士上田萬年・文學博士關根正直・安田善之助・名倉謙藏・田村成義・永井素岳・常岡丑五郎・細谷侘太郎諸氏殊ニ鈴木利平氏ノ助力ニ埃ツ所尠シトセズコ、ニ記シテ聊カ謝意ヲ表ス

明治四十四年十二月

東京音樂學校

凡 例

- 一 本年表ハ常磐津節ノ創始時代ニ始リ慶應三年ニ終ル
- 一 年表ヲ大別シテ本欄備考欄ノ二トス而シテ本欄ヲ更ニ分チテ常磐津富本清元ノ三トシ備考欄ハ便宜之ヲ設ケテ特ニ通ジテ一欄トセズ
- 一 本欄ハ此等三流ノ淨瑠璃ヲ年次ニ列記シ又各流派ノ名アル太夫三味線彈キノ歿時略傳ヲ年次ニヨリテ加ヘタリ而シテ劇場ニ用ヒラレシモノハ其外題・興行座及ヒ太夫三味線彈キヲ併記シ且其典據ヲ明記セリ
- 一 上記三流ノ各々ニ於ケル分派トモ見ルベキモノ例ヘバ常磐津ニ對スル豐名賀・富士岡等ノ如キ關係ノモノハ夫々其本流ノ欄ニ記入シ箱書ニシテ之ヲ區別セリ
- 一 備考欄ニハ本欄ニ載セタル語物ノ解題有名ナル淨瑠璃作者ノ歿時略傳及ヒ三流以外ノ豐後系ニ係ルモノヲ載ス但シ語物ノ解題ト其外題トノ間ニハ合符ヲ用ヒ又三流以外ノ諸流派ニ係ルモノハ框ヲ以テ之ヲ圍ミテ他ト區別シ易カラシメタリ
- 一 淨瑠璃外題ノ俗稱ハ括弧書ニシテ本外題ノ傍ニ之ヲ添ヘタリ

- 一 本年表ニ於テハ假令各流ノ名曲ト雖モ作曲年代ノ不明ナルモノハ止ムヲ得ズ之ヲ省略セリ
- 一 劇場ニ用ヒラレタル諸曲中比較的有名ナルモノニ限り登場俳優及ビ其役名ヲ併記シテ聊カ取材ヲ知ルノ便ニ供セリ
- 一 本年表中ニ引用セシ資料中

(年) ハ歌舞伎年代記・續歌舞伎年代記・江戸芝居年代記(寫本、二冊、帝國圖書館所藏) 芝居年表(寫本、二冊、高野辰之所藏)ノ略

(番) ハ歌舞伎ノ各種番附(絞番附・辻番附・繪草紙)ノ略

(常) ハ常磐種(寫本、五冊、常磐津家元所藏)ノ略

(聲) ハ聲曲類纂ノ略

(戲) ハ戲場年表ノ略

(忌) ハ名人忌辰録ノ略

- 一 本年表使用者ノ便ヲ圖リテ終ニ本外題竝ニ外題俗稱索引表ヲ載セタリ

(2) 『近世邦樂年表 江戸長唄 附大薩摩淨瑠璃之部』

大正三年五月二十五日、六合館書店發行。本文二百五十二頁、補遺三頁、索引二十六頁。

本年表ハ本校邦樂調査掛ニ於テ編成シタルモノニシテ曩ニ發刊セル「常磐津富本清元ノ部」ト共ニ將來完成セントスル近世邦樂年表ノ一部ヲナスモノナリ

本年表ノ編成ニツキテハ先例ノ據ルベキナク又資料ノ蒐集ニモ甚ダ

困難ヲ感ジタリ随ツテ今ナホ多少ノ缺陷ヲ認メザルニアラザレドモ暫ク之ヲ世ニ公ニシ博雅ノ指教ヲ得テ之ガ完備ヲ他日二期セントス

附言 本年表ノ計畫ハ本校邦樂調査員教授高野辰之コレヲ定メテ

ソノ編成ハ同調査囑託福田勘藏専ラ之ニ當レリ

資料ノ蒐集ニ關シテハ文學博士關根正直・故幸堂得知・安田善之助・永井素岳・小林文七・杵屋勘五郎・今藤長十郎・杵屋勝四郎ノ諸氏殊ニ六合新三郎氏ノ助力ニ便益ヲ得タルコト尠カラズコ、ニ記シテ厚ク感謝ノ意ヲ表ス

大正三年四月一日

東京音樂學校

凡 例

- 一 本年表ハ江戸長唄ノ創始時代ニ始リ慶應三年ニ終ル。
- 一 本年表ハ江戸長唄ヲ主トシテ、大薩摩淨瑠璃ヲ之ニ附屬セシメタリ。而シテ大薩摩淨瑠璃ハ箱書ニシテ之ヲ區別セリ。
- 一 年表ヲ上下二欄ニ別チ、上欄ヲ本欄トシ、下欄ヲ備考欄ニ充テタリ。
- 一 本欄ハ江戸長唄及ビ大薩摩淨瑠璃ノ外題作曲者等ヲ年次ニ列記シ、而シテ劇場ニ於テ演ゼラレタルモノハ其興行座及ビ長唄、三味線、囃子方、振附ノ連名竝ニ之ヲ演ジタル役者役名ヲモ併記セリ。又名家ノ歿時略傳ヲモ年次ニヨリテ加ヘタリ。
- 一 備考欄ニハ本欄ニ載セタル諸曲ノ解題及ビ信疑未定ノ在來ノ傳説等ヲモ収録セリ。例ヘバ「杵屋系圖」「大薩摩系圖」所載ノ江戸長唄、大薩摩淨瑠璃等ノ起源傳統ノ如キハ未ダ容易ニ信ズ可カラザル點アルヲ以テ、隨時コレヲ備考欄ニ收メタルガ如キ

コトコレナリ。又顔見世番附、役者評判記等ニ出デタル長唄囃子方ノ連名ニシテ、此欄ニ收メタルモノ少シトセズ、之ハ本欄ノ缺ヲ補ウテ三座囃子方ノ移動ヲ明白ナラシメンガ爲ナリ。

一 外題ノ俗稱ハ括弧書ニシテ本外題ノ傍ニ添ヘタリ。

一 本年表編成ニ當リ、其外題中、年代記、番附等ニ出デテ作曲年代ノ明カナリシモノハ其一小部分ニ過ギズシテ、其他ノ大部分ハ主トシテ繪表紙正本（稽古本）ヲ採リテ考證シ以テ其年代ヲ定メタルモノナリ。随ツテ現存ノ外題中ニテモ、年代ヲ考證ス可キ手掛リ無キモノハ止ムヲ得ズ姑ク之ヲ漏シタリ。

一 現存ノ稽古本ニハ再版物モ少カラズシテ、是等ニハ長唄囃子方等ノ連名ニ初版ノソレト異ルモノ無シトセズ。ヨリテ成ル可ク初版ノモノニ據ル方針ヲ採レリ。

一 長唄、三味線、囃子方ノ連名ハ正本又ハ番附ニ記載セルモノヲ其俣轉載シテ少シモ取捨ヲ加ヘズ、随ツテ此連名ハ古來斯界ニ行ハル、特定ノ規約ニヨル記載法ト見テ可ナリ。

一 「江戸長唄」ノ「長唄」ノ文字ハ古クハ「長歌」又ハ「長うた」ト記セシガ、明和以降「長唄」ノ文字ヲモ併セ用フル事トナリ、近代ニ及ビテハ専ラ「長唄」ヲ用フル事トナレリ。本年表ニ於テハ近時ノ慣例ニ從ヒ全部「長唄」ノ文字ヲ用フル事トセリ。

一 本年表ニ引用セシ資料中
(年) ハ歌舞伎年代記、續歌舞伎年代記、江戸芝居年代記(寫本、三冊、帝國圖書館所藏) 芝居年表(寫本、二冊、高野辰之所藏) ノ略
(戲) ハ戲場年表ノ略

(番) ハ歌舞伎ノ各種番附(絞番附、辻番附、繪草紙)ノ略

(正) ハ江戸長唄正本(稽古本)ノ略

(杵、系) ハ杵屋系圖(寫本一帖、明治元年十一代杵屋六左衛門編)ノ略

(大、系) ハ大薩摩系圖(寫本一帖、著者同上)ノ略

(聲) ハ聲曲類纂ノ略

(忌) ハ名人忌辰録ノ略

一 本年表使用者ノ便ヲ圖リテ卷末ニ本外題索引竝ニ外題俗稱及ビ變化物索引ヲ添ヘタリ。但シ本外題ト俗稱ト同一ナルモノハ本外題索引ノ部ニノミ之ヲ收メタリ。

(3) 『近世邦樂年表 義太夫節之部』

昭和二年一月十日、六合館発行。本文七百八十五頁、索引二十二頁。編纂に關して大正六年度(十二月十八日付)および八年度(十二月二十七日付)の調査報告書が残され、八年度にはほぼ脱稿していたことがわかる。しかし大正十二年の関東大震災でこの草稿の大半が焼失してしまひ、編纂を終えたのは大正十五年一月であった。

本年表ハ本校邦樂調査掛ニ於テ編成シタルモノニシテ、曩ニ刊行セラル「常磐津・富本・清元ノ部」「江戸長唄附大薩摩淨瑠璃ノ部」ト共ニ、近世邦樂年表ノ一部ヲナスモノトス。

義太夫節ハ我が邦近世音曲ノ根幹ヲナスト共ニ、又ソノ詞章ハ我が邦近世ノ戲曲トシテ極メテ價値アルモノナリト雖モ、未ダソノ年表トシテノ體ヲ備ヘタルモノヲ見ズ。故ニコレガ編次ニ當リテ、先例ノ據ルベキナク、又ソノ資料ノ蒐集ニモ極メテ困難ヲ感ジタリ。隨ツ

テ今ナホ多少ノ缺陷ヲ認メザルニアラザレドモ、暫ク未定稿トシテ之ヲ世ニ公ニシ、博雅ノ士ニ助言ヲ得テ完成ヲ他日二期セントス。本年表ハ本校邦樂調査掛主事教授高野辰之コレガ計畫ヲ樹テ、ソノ編成ニハ同調査囑託黒木勘藏専ラ之ニ當レリ。

資料ノ蒐集ニ關シテハ、朝野各位ノ援助ニ負フ所尠シトセズ。特ニ帝國圖書館・東京帝國大學附屬圖書館・東京帝國大學國語研究室・京都帝國大學附屬圖書館・早稻田大學附屬圖書館・大阪府立圖書館・岩崎文庫・久原文庫・大倉集古館附屬文庫・大阪朝日新聞社・文樂座・伊原敏郎・石田元季・細川賀茂・渡邊勝(故霞亭)・金杉彌太郎(二世豊竹古靱太夫)・坪井九馬三・故永田好三郎・藤井乙男・二見金助(故竹本攝津大掾)・木谷正之助・水谷弓彦・平出順吉郎等諸家ノ所藏ニ俟チタル所アリ。コ、ニ記シテ深ク感謝ノ意ヲ表ス。

大正十五年十二月

東京音樂學校

凡 例

- 一 本年表ハ義太夫節ノ創始時代ニ始マリ、慶應三年ニ終ル。
- 一 本年表ヲ本欄・備考欄ノ二ニ分ツ。
- 一 本欄ニハ義太夫節諸曲ガ操芝居ノ地トシテ演ゼラレタル年月日、ソノ外題、ソノ上場ノ座、ソノ太夫・三味線彈、詞章ノ作者又ハソノ正本ノ刊行年月日等ヲ年次ニ列舉シ、又斯流名家ノ歿時・略傳、操座ノ變動、出勤者ノ移動等ヲモ知り得タル限リ年月ヲ逐ヒテ掲載セリ。
- 一 備考欄ニハ本欄所載ノ各曲ノ解題、主要ナル人形遣ノ役割、歌

舞伎劇トノ關係、ソノ他參考トナルベキ事項ヲ収録セリ。特ニ箱書ニシテ收メタルハ、江戸ノ歌舞伎劇場ニ於テ演ジタル義太夫地ノ所作事ナリ。

一 本年表所載ノ各曲ノ上場年月又ハ正本刊行ノ年月ニ關シテハ、寶曆以前ノモノハ外題年鑑ヲ手引トシテ、正本・番附ソノ他正確ナル資料ニ基イテ之ヲ定メ、必ズシモ年代上ノ錯誤多キ外題年鑑ニ盲從セザルコト、セリ。而シテ寶曆以後ノモノハ専ラ正本ト番附トヲ基礎トナシテ其ノ上場年月ヲ考定セリ。

一 作者ハ主トシテ正本ニヨレリ。但享保以後ノ刊行ニ係ルモノハ、スベテ作者名ヲ掲ゲタレド、享保以前ノモノニハ作者ノ名ヲ逸セルモノ亦尠カラズ。是等ノ諸作ニ對シテハ、妄リニソノ推定ヲ下スコトヲ避ケ、正確ナル旁證ノナキ限りハスベテ「作者未詳」トシテ、後日ノ研究ニ俟ツ事トセリ。

一 操座出勤ノ太夫・三味線彈等ノ役割連名ハ専ラ番附ニ據ルヲ方針トセリ。サレド享保以前ニハ番附ノ發行ハナカリシモノカ、搜索甚ダ努メタレド殆ンド之ヲ見ルヲ得ザリキ。ヨリテ繪入細字本（貳本）・外題年鑑・淨瑠璃譜等ニヨリテ出來得ル限りソレヲ收メタルニ止マレリ。

一 本年表ニ收メタル名家ノ歿時・略傳ハ、ソノ據ル所多端ニシテ、一々茲ニ列擧シ難ケレド、太夫・三味線彈等ニツキテハ淨瑠璃大系圖ニ負フ所多シ。

一 備考欄ニ載セタル解題ハ簡略ニ過グルノ嫌ナキニ非ザレドモ、年表ノ附載トシテハマタ止ムヲ得ザルニ出ツ。サレド本年表使用者ガコレニヨリテ研究上ノ手ガカリヲ得ルコト決シテ尠カラ

ザルベキヲ信ズ。

一 本年表ニ引用セシ資料中略符ヲ以テ示セルモノ左ノ如シ。

(正) 義太夫節正本 (丸本)

(番) 操芝居番附

(操) 今昔操年代記

(外、寶) 外題年鑑寶曆七年板

(外、明) 外題年鑑明和五年板

(外、安) 外題年鑑安永八年板

(外、寛) 外題年鑑寛政五年板

(譜) 淨瑠璃譜 (一名、諸事聞書往來)

(系) 淨瑠璃大系圖 (廿二卷、竹本長門太夫編)

(年) 劇場年鑑 (寫本三冊、濱松歌國編?)

一 本年表ニハ使用者ノ便ヲ圖リテ特ニ詳密ナル索引ヲ卷末ニ添ヘタリ。

箏曲集

音楽取調掛は伝統音楽の普及を目的として俗曲改良事業、すなわち箏、三味線音楽の歌詞改良を行った。箏曲、長唄に着手したが、その成果としての第一冊目に当たる五線譜『箏曲集』は明治二十一年十月、東京音楽学校になってからようやく公刊されている。そして伝統音楽の調査・研究が縮小を余儀なくされてゆく中で続刊はならなかった。継続が再開されるまでに二十年を要し、邦楽調査掛において『箏曲集』の改訂版である『箏曲集第一編』と『同 第二編』が刊行された。しかし原稿も完成して続刊を予定していた『第三編』は公刊されず、『第四編』は作業途中で立ち消えとなっている。音楽取調掛時代の俗曲改良事業および『箏曲集』編纂の経緯については、蒲生郷昭「俗曲改良と『箏曲集』」

(東京芸術大学音楽取調掛研究班編『音楽教育成立への軌跡』一九二六、音楽之友社)を参照されたい。

ここでは、公刊された『箏曲集』二編の「緒言」「凡例」「目次」および未刊二編の曲目を掲載する。

(1) 『箏曲集第一編』

大正三年九月廿六日刊行。東京音楽学校編、大日本圖書株式会社発行。楽譜六十五頁、歌詞十一頁。

緒言

一、本編は明治二十一年十月本校の發行に係る箏曲集の譜を修訂したるものなり。

二、譜の修訂は、本校邦楽調査員教授今井新太郎等主として之を擔任せり。

三、從來箏曲家の間には慣用の術語及び記號あり。本編は成るべく之を採用して初學者の便を圖れり。

四、修訂前の箏曲集の緒言は、選定當初の方針を知るに足るを以て下に録す。

一、本編は、曩に音楽取調掛に於て査定せし、本邦俗曲中に就きて、箏曲の稍階梯と爲るべき者を輯録したるなり。

一、本編は、多く舊箏曲中の佳良なる者を選録すと雖も、其詞調の卑猥陋俗に失して、教化に害ある者は、易ふるに高雅純正なる者を以てして、微を防ぎ漸を杜がんことを圖れり。又從來箏譜と稱する者無きには非ずと雖も、歌詞と樂

譜とを併せて明記する者無く、又歌曲の難易を量りて、學習の順序を定むる者無きを以て、今本編には、音楽上普通の記譜法を用ひ、徑ちに樂譜を歌詞の上に附して、其曲調を詳にし、又易きを先にし難きを後にして、學習の際、授受に便ならしめんことを期せり。

一、本編歌詞の改良に於ける、或は全文を改作し、或は一部を修正す。而して全部の稍佳なる者は、別に潤色を加へず。曲調に於けるも亦然り。

此の餘、又歌詞曲調俱に新製に係る者あり。要するに皆箏曲本來の性質を失はざらしめんとするの意に出でたるなり。

一、本編歌詞の選定は、該掛員里見義、加部嚴夫の擔當に係り、曲調の査定は、山勢松韻、山登萬和、山登松齡、山多喜松調、荒木古董、奥山朝恭等の擔當に係れり。而して竝に同掛長伊澤修二の統理考定する所なり。

大正三年九月

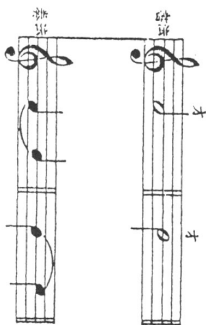
東京音楽学校

凡例

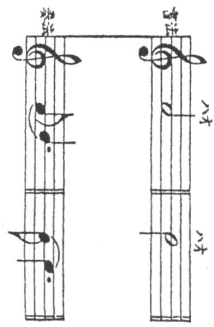
本編用ふる所の術語及記號下の如し。

左手に屬するもの

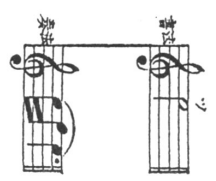
『オ』^{オレイロ}押の略。某絃を弾いたる後、左手の食、中、無名の三指にて之を押し、半音或は一音を高むるをいふ。



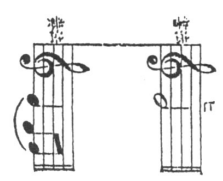
『ハオ』早押の略。「オ」より速に押すをいふ。



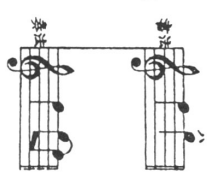
『ツ』控の略。某絃を弾じて、直に前記三指にて、其絃を突き疾く放つをいふ。



『ヒ』臍の略。弾じたる絃を前記三指と拇指とにて撮み、右方へ引きて半音或は一音を低め、直に放つをいふ。



『ハ』押放の略。前記三指にて先づ某絃を半音或は一音高め置き、弾じたる後、放つをいふ。



右手に屬するもの

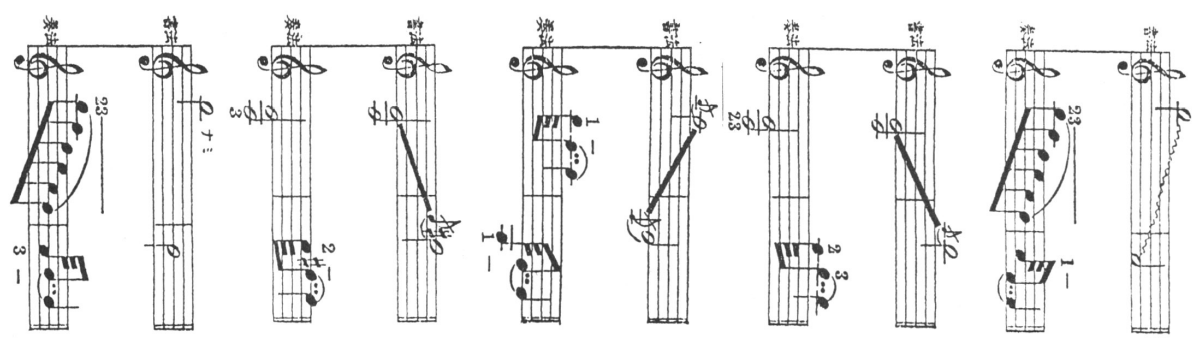
『裏連』右手の食中二指の爪裏にて巾より始めて數絃を撫で、拇指にて止の絃を弾ずるをいふ。

『引連』中指に食指を添へて第一第二の兩絃を弾じ、爲巾をも亦同指にて彈ずるをいふ。

『流爪』拇指にて巾爲を弾じ、止の絃をも亦同指にて彈ずるをいふ。

『引捨』中指にて第一第二の兩絃を弾じ、食指にて止の絃を彈ずるをいふ。

『ナミ』波歸の略。食、中二指の爪裏にて巾より初め、多くは第八弦までを裏連の如くに弾じ、中指の表にて止の絃を彈ずるをいふ。



『摺爪』二つの弦を食、中二指の爪脇にて擦るをいふ。左方に向ひて擦るをスリ上といひ、右方に向ひて擦るをスリ下といふ。
 『ス』排爪の略。拇指の爪裏にて絃を抄ふをいふ。
 『フ』輪連の略。食、中二指の爪脇にて左廻りに輪をかかすが如く絃を擦るをいふ。

以上の外下記の術語あり

『搔』中指にて二つの絃を搔くをいふ。

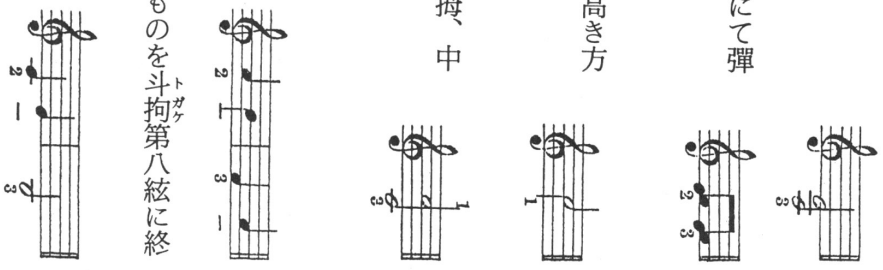
『割爪』二つの絃を始めに食指、のち、中指にて弾ずるをいふ。

『押合爪』二つの絃の低き方を左手にて押し高き方に合せて其二絃を拇指にて弾ずるをいふ。

『合爪』其絃と某高音に當る絃とを同時に拇、中二指にて弾ずるをいふ。

『拘爪』圖の如く始めの二絃を食指、後の二絃を中指にて弾じ、更に拇指にて他の絃を弾ずるをいふ。而して其拇指にて弾ずる絃名を以て拘爪の名稱とす。例へば斗に終るものを斗拘第八絃に終るものを八拘といふが如し。

『半拘』圖の如く二つの絃を食指にて弾じ後中指にて他の絃を弾ずるをいふ。而して



多くは其中指にて弾ずる絃の高音に當る絃名により其名稱とす。例へば其高音が斗に當る時は斗の半拘、八に當る時は八の半拘といふが如し。
 『懸押』左手の拇指にて其絃を押し、次に食、中、無名の三指にて他の絃を押すをいふ。

附記

一、音符の上或は下に記したる123は右手の指の記號にして1は拇指、2は食指、3は中指なるを示す。

二、I II III IV V VI VII VIII IX X斗爲巾は絃名を示す。

目次

姫松若竹	(1)
櫻	(2)
花競	(3—4)
螢	(5—6)
歌の道	(7—8)
落梅	(9—11)
弓八幡	(12—13)
手習	(14—15)
小野の山	(16—21)
秋の七草	(22—28)
富貴の曲	(29—30)
雪の朝	(31—40)
東雲の曲	(41—50)

春の花……………(51—60)
 六段の調……………(61—65)
 (横組)

(2) 『箏曲集第二編』

大正三年二月十一日刊行。東京音楽學校編、大日本圖書株式会社發行。楽譜八十一頁、歌詞九頁。『第一編』より先に刊行された。「凡例」のうち『第一編』と同じ内容は省略した。

緒言

- 一、本編收むる所の楽曲は凡て山田流に據れり。
- 二、楽曲は早春の興(中村秋香作歌)を除く外は皆故本校教授山勢松韻の譜を本とし、今回更に本校邦楽調査員教授今井新太郎等をして増補修訂せしめたるものなり。
- 三、従来箏曲家の間には慣用の術語及び記號あり、本編は成るべく之を採用して初學者の便を圖れり。

大正二年十一月

東京音楽學校

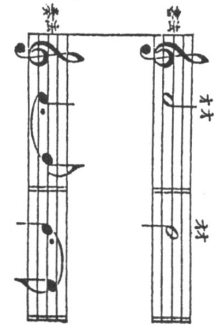
凡例

本編用ふる所の術語及び記號下の如し。

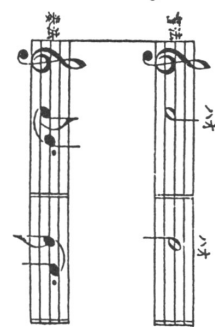
左手に屬するもの

『オ』〔『第一編』と同じにつき省略〕

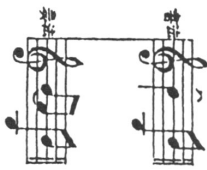
『オオ』遅押の略。「オ」より遅く押すをいふ。



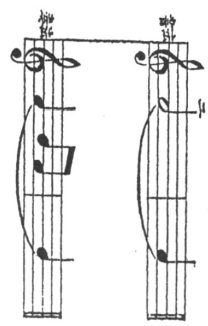
『ハオ』早押の略。「オ」より速に押すをいふ。
 『ツ』『ヒ』〔『第一編』と同じにつき省略〕



『ハ』〔記譜例を変更〕



『ユ』搖吟の略。弾したる弦を前記三指にて二回或は數回押し揺がすをいふ。



右手に屬するもの

『裏連』『引連』『流爪』『引捨』『ナミ』『摺爪』『ス』『ワ』

〔『第一編』と同じにつき省略〕

「チ」散爪チラシツメの略。中指の爪脇にて絃を拂ふが如く擦るをいふ。

以上の外下記の術語あり

「搔」カキ 「割爪」ワリツメ 「押合爪」オシアヒツメ 「合爪」アハセツメ 「第一編」と同じにつき省略

「三つ弾」ハシキ 某絃を始に拇指の爪裏にて抄ひ、次に食、

中指の順にて弾するをいふ。

「拘爪」カケツメ 「半拘」ハンカケ 「第一編」と同じにつき省略



附記

一、「第一編」と同じにつき省略

二、「」

三、右の外二個の記號の連合せるものあり。例へばス、ヒはスクヒ、ヒキイロの連合なるが如し。

目次

三つの船	1—5
雲の上	6—15
松むし	16—21
八段の調	22—27
榮ゆる宮	28—34
薄霞	35—42
友千鳥	43—52
早春の興	53—60
美だれ	61—68
椿づくし	69—81

(横組)

(3) 「箏曲集第三編」(楽譜および歌詞集原稿) / (未刊)

(所収曲目) 千鳥の梅・常磐の榮・玉川・かざしの雪・江の島・明石・七段の調・四季の友・松づくし・四段砧・櫻狩・越後獅子・六段の調替手

(4) 「箏曲集第四編」(未完)

(予定曲目) 末の松・住吉・大和心・九段調・那須野・八段調替手・名所土産・春日詣・四季の富士・新高砂・紀の路の奥四季の段・夕顔・松の榮・浪花獅子

その他の出版計画

議事録に見るように邦楽詞章の解説(「議事録」明治四十一年十一月十日以降の記事)、三味線教則本(「記譜法議事録」大正四年二月五日)などの出版が計画されていたが、いずれも刊行には至らなかった。後者に関しては直接に明示した出版資料は見当たらないが、『箏曲集』関連曲の三味線記譜が行われているのは、これに関係するかもしれない。邦楽詞章に関しては『邦楽詞章通解稿本 第一集』として整い、稿本を内務省警保局に提出して出版許可を待っていた。指摘された修正箇所を検討して再度回送したが、結局は出版中止となり、編纂責任者であった高野辰之のもとに預けられる形になった。俗曲改良とは異なり詞章通解となると学校出版である点からも難しい面があったものと想像される。本来は邦楽年表より先に出版が予定されており、第二集の収録曲も決定していた。選曲された曲目もすでに五線譜への採譜が進められている。その採譜も当然出版を目的としていたが、『箏曲集』以外はこれも公刊には至らなかった。日付がないが、計画を示す「出版の理由」と題した原稿が残されている。また出版原稿用にまとめられた楽譜に、「劇場合方第一集」として「三下り合方附竹笛入合方」が残る。左に「邦楽詞章通解」関連及び楽譜関連の資料を載せる。

(1)「報告書第一巻豫定」

書名が「邦樂詞章通解」に決まる以前の計画書。曲目は「邦樂詞章通解 稿本第一集」所収曲と同じ。

報告書 第一巻 豫定

順序

會長ノ序 (調査會ノ方針 經過ノ大略、註解ヲ先ニ出ス所以)

凡例

豫定頁數

○一中物 助六心中 提出濟 四〇

辰巳の四季 一五

○富本 歲朝嘉例壽 一八

其倂淺間嶽 六〇

○清元 深山櫻及兼樹振 一五

梅の春 二六 九月中旬ニ提出ノ豫定

○長唄 めりやす考 提出濟 一六

五大力 〃 四

以上 本文凡二百頁 序文凡例ヲ合セテ二百二十頁前後

製本ノ体裁

一、菊版大ノコト (大和綴カ)

二、用紙ハ和紙ノコト

三、活字ノ大小

解題ノ本文ハスベテ四號活字ニテ一頁十二行二十八字詰

引用文ハスベテ五號ニテ一頁十五行三十五字詰

詞章ノ本文ハスベテ三號活字ニテ一頁十行二十字詰

註解ハスベテ五號活字ニテ上欄一頁十六行十二字詰

四、各流ノ詞章ヲ識別スル爲メニ色刷ノ紙ヲ挿入スルコト

書名ハ

邦樂名章通解 第一巻

(一中、富本、清元、長唄)

にては如何

(手書き)

(2)「邦樂詞章通解稿本 第一集」(明治四十二年十月)

原本は斑山文庫(長野県下高井郡野沢温泉村 おぼろ月夜の館)に所蔵される。「稿本」に付記される出版中止の記述部分(高野辰之執筆、次いで「緒言」「目次」「凡例」を載せる。なお、一部は後年高野辰之により雑誌「邦樂」の連載「邦樂各流名曲評釋」(大正五年〜八年)に転載されている。

明治四十一年十一月より四十二年九月までの間東京音樂學校邦樂調査事業の一として各流の名曲に註解を試ることに決し予之を擔當す^(*)。其年にして數篇稿を脱す。もと學校の名を以て之を公刊するの方針たりしなり然るに中止することに決しすなわちあげて予に下附せらる。予之を請け事由を巻頭に記して架に藏することとせり時に明治四十三年三月也

斑山 高野辰之識

(明治四十二年十月)

邦樂詞章通解稿本 第一集

緒言

邦楽中江戸長唄、一中、常磐津、富本、清元等所謂俗樂に屬するものの詞章を見るに、舞踊に伴ふものと然らざるものとの別あり。後者は必ずしも然らざれど、前者に至りては作意は支離滅裂にして散漫、詞章は蕪雜にして鄙陋、一讀して其の意を解し得るものはなしといはんも可なり。固より此の種の詞章は普通散文の格を以て議すべきにあらずと雖も、當り文句を臚列するにあらずんば時代の流行を穿つに力め、意の徹底を期せずして、曲調の波瀾と目先の變化とのみを重んじ、各節の間には何等の關係をも認め難きもの多し。寄木細工に似たりとの評、説きて餘蘊なしといふべし。語る者其の意を知らず、聽く者亦解せざるは宜なり。之を註解して、詞句の含蓄を説き、行文の緣由を示し、一篇の意の存する所を明にせんは容易の業にあらず。

淨瑠璃の詞章は室町時代に起り、徳川の初世に續出し、元祿の近松門左衛門に至りて、はじめて絢爛と巧緻と円熟とを見、爾來出雲より宗輔、宗輔より半二、時の下るに従ひ、ますます結構に巧を弄して詞藻に背けり。これに次ぐの狂言作者に至りては、愈出でて愈拙なり。世に無學者の不文程解し難きはあらず。解説の難は上代の彼にあらずして近代の此にあり。

茲に解題を附して註解する所のもの、一半は是等狂言作者の筆に成れり。檢索甚だ力めたりと雖も、遂に其の意を得ずして止みたるものあり。或は解し得ざるにあらずして知らざしりものもあるべし。今稿本を出すに當り、寡聞不才謹んで博雅に高教を仰ぐ。

目次

凡例
 曲節略解
 一中節
 萬屋助六道行
 辰巳の四季
 富本節
 歲朝嘉例壽
 其倅淺間嶽
 清元節
 深山櫻及兼樹振
 梅の春
 江戸長唄
 めりやす考
 五大力
 凡例
 一 本文はすべて稽古本の儘にせり。稽古本は多く假名書にして、いとキ、いとヒ、ウトフ、エトエ、オトヲ、ホトヲ等の假名遣を混同して、誤れる所多けれども、流布既に久しきものなれば暫く丁もこれを改めず、當字の類も亦然り。
 一 墨譜は到底活版印刷物に望み難きを以て、すべてこれを省きた

れども、曲節句切等に至りては悉く稽古本に則りて省略せず。

一 曲節は一々之を解かず、総括して略解を巻首に掲ぐ。詳細は樂譜發表の際に譲る。

一 語句の註解には時に精粗の別あり。一通り其の意を解かば本文の意を取り得べき所にて、縷々詳細に涉りたる所なきにあらず。これ他の詞章の意を得るに便せんとしたるなり。

一 此の種の書の體裁につきては本文の一段をあげては其の後に語句の解を附すること當代の習はしの如くなれど、讀者の便よりいへば、むしろ頭書を主とするのまされるに如かず、よりて暫く湖月抄、春曙抄等の體に倣ふ。
〔手書き〕

(3) 「出版の理由」

五線譜樂譜の出版に関する記録。日付なし。記載された曲はほぼ大正三年までには調査が済んでいる。最後の「劇場台方」も大正二年一月には既に整えられていた。

出版ノ理由

- (1) 古曲ノ保存ノ爲
- (2) 名曲ノ研究ノ爲
- (3) 古曲ニシテ名曲タルガ爲
- (4) 作曲材料調査研究ノ爲

平曲

- (1) 木曾最期 古曲ノ調査研究
- 能樂

(2) 松弁慶 名曲ノ調査研究

附早笛 イロへ、ものぎ、はたらき、次第、中の舞
半太夫節

(1) 小鍛冶名劍の卷 古曲ノ調査研究

河東節

(2) 助六廓家櫻(助) 名曲ノ調査研究

都一中節

(3) 頼光山入の段 古曲トシテ且名曲トシテノ調査研究

(3) 辰巳の四季 古曲トシテ且名曲トシテノ調査研究

菅野一中節

(3) 二重帶名護(屋)結(おさん伊八) 古曲トシテ且名曲トシテノ調査研究

査研究

(2) 泰平船盡し 名曲ノ調査研究

常磐津節

(3) 子寶三番叟(こだから) 古曲トシテ且名曲トシテノ調査研究

(3) 積戀雪關扉(せきのと) 上 古曲トシテ且名曲トシテノ調査研究

富本節

(2) 拙筆力七ツ伊呂波(乙姫) 名曲ノ調査研究

(3) 草枕露玉川(たまがは) 古曲トシテ且名曲トシテノ調査研究

清元節

(3) 梅の春 古曲トシテ且名曲トシテノ調査研究

(3) 深山櫻及兼樹振(保色) 古曲トシテ且名曲トシテノ調査研究

(3) 北州千及壽(北州) 古曲トシテ且名曲トシテノ調査研究

長唄

(3)京鹿子娘道成寺(娘道成寺) 古曲トシテ且名曲トシテノ調査研究

めりやす

(1)明の鐘 古曲ノ調査研究

(1)賓頭盧 古曲ノ調査研究

(1)きせう 古曲ノ調査研究

(1)壽 古曲ノ調査研究

(1)猫の妻 古曲ノ調査研究

劇場合方

(4)劇場合方三下り第一集 作曲材料調査研究

(手書き)

(九) 図書展覧会

図書展覧会が四回催されている。邦楽調査掛主催は三回で、一回目は大正二年十二月十四日(日)第七回邦楽演奏会当日に開催し「本校及本校関係者ノ家元等ヨリ邦楽ニ關スル圖書肖像及樂器等最古珍ラシキモノヲ陳列シ展覧に供」した(同日「日誌」)。目録は残されていないが、浄瑠璃・長唄・歌舞伎番附関係が展示された。後の二回の展覧会については関係文書綴などが残存し、出陳目録も作成されている。すなわち大正三年に能楽図書展、大正五年に雅楽および声明図書展が開催され、多数の貴重書が展示された。品目は関連種目も合わせて多岐にわたっている。雅楽では邦楽調査掛による五線譜採譜の成果も披露した。それらの『目録』から緒言と「凡例」「目次」を載せる。なお雅楽および声明図書展では兼常清佐(調査囑託)が同展に関する小論を記している(目録「附録」)ので合わせて掲載する。なお、四回目は創立五十周年記念展観(昭和四年十一月二十八日)において、邦楽調査掛関係の資料が多数展示された。

(一) 『能楽圖書陳列目録』

本文百十二頁、附録(明治大正年間刊行陳列圖書一覽表) および目録追加(謄写版)各一枚。

昨大正二年十二月第七回邦楽演奏會ヲ開キ別ニ邦楽ニ關スル古書數百點ノ展覧會ヲ催シタリシガ其ノ範圍ヲ浄瑠璃・長唄・歌舞伎番附ノ類ニ限リタリシヲ以テ今更ニ能楽ニ關スル圖書一千餘點ヲ輯集シテ博雅ニ來觀ヲ乞フコトセリ率爾ノ間ニ企テタルヲ以テ搜索探訪未ダ到ラス名著珍籍ニシテ漏レタルモノ定メテ多カルベシ同好ノ士ニシテコレニ載セザル圖書ヲ藏セラレナバ其ノ書目ト解題トヲ寄セテ能楽書目ノ完成ニ資セラレンコト切望ニ堪ヘズ

今回陳列ノ書多クハ他ヨリ借入レタルモノニシテ就中安田善之助細谷侘太郎(六合新三郎)丸岡桂理學博士徳永重康林若吉五氏ニ提供ヲ乞ヒシモノ過半ヲ占ム而シテコレガ整理類別等ニ關シテハ教授高野辰之ヲ主任トシ能楽授業囑託池内信嘉邦楽調査囑託福田勘藏同細谷侘太郎等ヲシテ事ニ當ラシメタルモノナリトス
大正三年十一月二十二日

東京音樂學校

凡 例

- 一 部門ヲ分チテ謠・能・囃子・記録系譜・故實雜載・狂言・肖像繪畫類ノ七部トシ更ニ細別シテ十餘類トナス
- 一 書留・傳授書又ハ何々大成ト題スルノ類其ノ記ス所多端ニ涉リテ其ノ所屬ヲ定メ難キモノハ便宜其ノ重キヲ措キタリト認メタル部類ニ編入セリ例ヘバ舞樂大成ヲ形附ニ能之圖式・能楽圖彙・謠